京極読書新聞 ＜第16号＞

発行日　平成22年 9月　1日（水）
京極町生涯学習センター湧学館

京中生にインタビュー

第４回

平成21年度読書感想文コンクール受賞者インタビュー、いよいよ最終回です。

柴山あかりさん（1年生）「きみの友だち」
柴山楓子さん（3年生）「きみの友だち」

―――この本は、お姉さんのおすすめ本なんでしょうか。

楓　子　いえ、ちがいます。反対なんです。妹が読んでいた本を私が読んで、心に残ったので感想文にとりあげました。

―――へえ、そうなんですか。本の内容から、お姉さんが読んでいた本を、妹さんがちょっぴり背伸びして読んでみた…みたいなことを想像していたのですが、そうじゃないんですね。聞いてみないとわからないものですね。

あかり　この本は、お母さんからすすめられました。

―――なるほど。私は、お二人の読書感想文にすすめられる形でこの本に出会いました。読んでよかったです。「いじめ」のことを書いた小説なのかと思っていたら、それだけじゃなかった。友情とか、ライバルとか、親友の死とか、主人公の和泉恵美のまわりでいろいろな物語が生まれてくる小説だったんですね。

楓　子　この小説の中には、今まで自分が経験したことと重なることも多くて、共感できることもあれば、考えさせられることもありました。

「きみの友だち」
重松清著 / 新潮社

―――「きみの友だち」というネーミングがいろんな意味を含んでいておもしろい。登場人物たち、たとえば恵美の弟のブンちゃんにとっての「きみ（ブン）の友だち」とか、病気とたたかう由香ちゃんにとっての「きみ（由香）の友だち」とか、いろんなことを考えさせる本ですね。

楓　子　恵美は由香ちゃんだけが友だち、と思っていたみたいだけれど、結局、ちがいますよね。堀田ちゃんも西村さんも、恵美の一言で変わってゆくわけですから。

―――そうですよ。バレンタインに義理チョコももらえないカッコわるい佐藤くんですら変わって行く。この本の話で、いちばん印象に残ったのは、じつは佐藤くんの話でした。

>>2ページ目に続きます

京極読書新聞は
毎月１日発行です。

あかり　ブンちゃんとモトくんのライバル関係や友情も読んでいて楽しかったのですが、やはり、「みんな」から離れていても、でも寂しくなんかない…という恵美と由香の二人がカッコいいなと思いました。この本を読んで、私ももっともっと友だちが増えるといいなと感じました。

―――今回みたいに、姉妹（きょうだい）で、おもしろい本のことを教えあったりとか、するんですか。

楓　子　いや、あまりないですね。

あかり　好きなものとか、熱中していることとか、ちがいます。

―――今、夢中になってる本とか、ありますか？

あかり　私は、この重松清さんの本をつづけて読んでいます。

楓　子　私は山田悠介さんの本が好きです。最近、映画「告白」を観ました。

京中生にインタビュー 第4回

坂本明日美さん（2年生）「天と地を測った男」
高木美佳利さん（2年生）「夢をつかむ法則」

―――高木さん、感想文の最後で「私は絶対歌手になってやる！」と書いてますけれど、まわりの人たちの反応、どうでしたか？ みんな、ぶっとんだ？（笑）

高木　そんなに驚いた人はいませんでした（笑） みんな、知っていますから。この「夢をつかむ法則」を読む前から、みんなにも家族にも言っていることですし、隠すつもりもありませんし。

―――そうですか。私はこの読書感想文を読んで、今時の若い人にはめずらしい、ここまではっきりものが言える人がいるんだと知ってうれしくなりましたよ。今の人って、別に…とかいう感じで、曖昧にぼかす人が多いでしょう。夢を実現できなかった時が恐いからなのかな。

高木　どうなんでしょうね。私の場合は、前々から思っていた夢が、この本に出会ったことで、はっきりした形になった気がします。

坂本　夢をつかむための努力のかけ方が具体的に書かれているので、それぞれの人の「夢」にとってヒントを与えてくれます。

―――坂本さんも、この本を読んだのですね。

坂本　はい。というより、クラスのみんながこの本を読んでいます。

高木　著者の向山恵理子さんが担任の山本先生の知り合いだった関係で、向山さんがクラスの人全員に一冊ずつサイン入りでプレゼントしてくれたんです。

―――へえ。なにか、いい話ですね。私も、今回の2冊の本は特に、中学や高校時代に出会うのがいちばん理想的な本だなと感じました。坂本さんと「伊能忠敬」の出会いも、これもなかなかいいんだよね～。

坂本　私も声優になりたいとか、作家や舞台女優になりたいという夢がありますが、その途中の道で「伊能忠敬」という人を知ったことはとてもよかったと思います。

―――坂本さんの感想文、最初の一行は「私にはまねのできない生き方」と始まるんですけど、伊能の人生をたどって文章を展開して行く中で、「私にはまねのできない」の意味合いがどんどん変化して進化して行くのがすごくカッコいい。おとなでもなかなか使いこなせないような文章テクニックですよ。

坂本　ありがとうございます。たしかに、伊能のように壮大な夢を持ち、歴史に名を刻むような生き方は私にはとてもできません。けれど、「あきらめない」という伊能の気持ちや考え方は、私の日常でまねはできる…と気づいたのです。どんなに小さなことでも、あきらめないで貫きとおしたなら夢に近づけると、本は教えてくれているように思いました。

「天と地を測った男」
岡崎ひでたか著/くもん出版

「夢をつかむ法則」 向山恵理子著
/角川学芸出版角川出版企画センター

――――高木さんの感想文にも通じる思いですね。

高木　そうです。向山さんの「法則」をコピーすることが、この本を読むということではないと思います。大事なのは、自分の夢を追う上でどうすれば良いのか、頑張れるのかをこの本の中から見つけて、自分流「夢をつかむ法則」を生きなければいけないということだと思います。こういう風に、人の生き方が何か変わるきっかけ、そのきっかけを私は音楽という形で作って行きたいです。

京中生にインタビュー第4回

インタビューを終えて　（湧学館 新谷保人）

昨年度の第20回読書感想文コンクールで入賞した京極中学校生15名に、感想文でとりあげた本のおもしろさを語っていただきました。忙しい学校生活の中、取材のために時間をさいてくださった生徒さん、先生たちに感謝いたします。

インタビューは昼休みの15分間を使って行いました。時間を無駄にしないためにも、かならず本と感想文の両方を事前に読み込むことを心がけましたが、読みが甘く、意味の通らない質問になったこともあったかもしれません。文中、受賞した生徒さんたちは流れるように私の質問に答えてくれていますが、実際には、口べたな生徒さんもいますし、恥ずかしがり屋の生徒さんもいます。そういう場合は、読書感想文に書かれている文章を会話に引用させていただきました。「こんなによくしゃべる子ではないのに…」と感じられたご父兄もいらっしゃると思いますが、それはこのような事情によっています。

湧学館では感想文でとりあげられた本は極力蔵書に揃えるよう心がけています。各年度のコンクール入賞作をまとめた「作品集」も全年度分を取りそろえています。インタビューの中で、作品集の中で、「この本はおもしろそうだな…」という本がありましたら、ぜひ湧学館をご利用ください。

1947年10月18日の京極町 大火半年前の脇方もはっきり映っている！

湧学館では、終戦から2年後の昭和22年（1947年）10月、米軍飛行機が京極町を撮影した航空写真を入手しました。当時の京極市街はもちろん、国鉄胆振線や錦・東花・更進・北岡など今はなき小中学校も上空から確認できます。さらに、この写真が貴重なのは、昭和23年5月の大火によって大きく町の姿が変わる直前の脇方の町を映しだしていることなのです。日鉄の鉄山、社員住宅、脇方駅、脇方小中学校、神社など賑わっていた頃の脇方の町がくっきりと映っていることに感動をおぼえます。こんな写真があったとは！

次号より、「京極読書新聞」にて、63年前の京極町を読み解く歴史ツアーの企画をはじめます。みなさん、期待してください！

京極から文学散歩　第4回　石川啄木の北海道放浪

湧学館司書　新谷　保人（あらや・やすひと）

明治40年（今から103年前です）の8月25日夜、函館の石けん工場から出た火は、折からの台風の強風にあおられ一気に街中に燃え広がります。全焼した町内は14、一部焼失した町内が20、焼失戸数1万2390に及ぶ大火災となりました。これが、函館の歴史の中でも1，2を争う規模の大火事、「函館大火」です。

この大火の被害者の中に石川啄木もいました。そう、「東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたはむる」の、あの啄木です。彼は岩手県渋民村のふるさとを出て、生活の立てなおしをはかるため、明治40年5月、函館へ来ていたのです。幸い、啄木の家は焼けませんでしたが、彼の勤め先である弥生小学校や函館日々新聞社は焼けてしまいました。函館での生活の糧をすべて失ってしまったのです。それが故に、ここから札幌～小樽～釧路と流れ流れてゆく、啄木の北海道放浪の一年間がはじまります。

しかし、この台風は函館の街に被害を与えただけではありませんでした。北海道に上陸する数日前、関東や東北で大雨をもたらし各地に大洪水をひき起こしていたのです。特に、山梨県。死者233名、全壊・流失家屋約5千戸。その被害は山梨県において二十世紀最大の自然災害というべき規模でした。毎年続く大洪水被害に、ついに、この土地での生活をあきらめる人たちも出てきたのです。

「山梨県移住民団」。生活の術を失った3千人を超える人たちがめざしたのは北海道でした。それも、この羊蹄山麓の地域です。なぜこの地を選んだかについてはいろいろな説がありますが、その中のひとつに、羊蹄山が故郷山梨にそびえていた富士山に似ていたからだという説があります。現在でも、倶知安町や京極町、赤井川村には「山梨」「甲斐（山梨の古い呼び方）」などの地名があるのはその名残りといえましょう。村の人口が爆発的に増えました。明治43年、この地域は「東倶知安村」として倶知安村より独立します。「東倶知安村」は現在の「京極町」。その独立の影には、この明治40年夏の台風がからんでいたのです。

真夜中の
倶知安駅に下（お）りゆきし
女の鬢（びん）の古き痍（きず）あと

職を求めて函館から札幌に向かう夜行列車の石川啄木。午前二時の倶知安駅。真夜中の駅に降りたった女の人は東倶知安村に帰ったのかもしれませんね。ややドラマチックにすぎるような気もしないではない歌ですが、「くつちやん」という響きが憎めなく、私は昔から大好きです。いや、それよりも、なによりも、山梨県移住民団の子孫もまだ多く暮らしているこの百年後の京極町で、皆さんと一緒にこの歌をあじわうことなるとは思ってもいませんでした。なにか、この歌には不思議な縁を感じています。

京極町字甲斐の
「山梨県民移住記念碑」

碑は安山岩の自然石で「山梨県民移住記念標」「明治四十一年四月」、うら側には「移住十周年記念」と刻んでいる。

（「京極町史」より）

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101　京極町字京極158番地1
TEL　0136-42-2700（代表）
FAX　0136-42-2032
E-Mail　yugakukan@town-kyogoku.jp

ホームページもご覧ください
http://lib-kyogoku.cubet.com/